

2020年6月30日(火)

老球の細道550号

6月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

坂下高校に勤務していた頃TVの「鬼平犯科帳」が大好きだった。ドラマの内容はもちろんだが、ジプシーキングのエンディング曲をバックにした江戸の四季折々の風景も良かった。その中で特に梅雨時のアジサイに心を惹かれ、それ以来アジサイの大ファンになった。道端のアジサイを眺めながらの散歩は6月の至福のひと時である。

1・テレビから

◆「人のお世話になるな 人のお世話をするよう そして報いを求めぬよう」〈BS・TBS：にっぽん歴史鑑定：杉原千畝ユダヤ人を救った命のビザ〉：杉原が若かりし頃、ロシア語を学ぶために通ったハルピンの日露協会学校校長後藤新平からの教えだという。2011年の東日本大震災時には、イスラエル大使館から杉原の行為に対する恩返しだと相当の援助物質が被災地にとどけられた。木枯らし紋次郎も「あっしにはかかわりありません」と言いながら、困っている人を人知れず助け、決して恩をきせなかった。人を惹きつける黄金律である。

2・読書から

◆「われわれが旅行するのは着くためではなくて、旅行するためである」〈手塚富雄著『人類の知的遺産・ゲート』（講談社）〉：新型コロナによって高校生の色々な大会が中止になっていった時期に出会った言葉である。大会がなくなったのは残念だが、それ以上に日々の活動にこそ部活動の本当の意義があるのでは。プロセスが充実していれば悲観する必要なし。

◆「我々はしたいことのできるものではない。ただできることをするものである」〈芥川龍之介『侏儒の言葉』（河出書房）〉：今の世の中まさに一寸先は闇。やりたいことができなくなった時、そこですぐにあきらめるのではなくて、できる範囲で続けていけばなんとかなる。

◆「今まで当然と思っていることを当然と思わないで問いを発するところから“発明”が出てくる」〈丸山真男『文明論之概略を読む・上』（岩波新書）〉：積読していた本であるが、福沢諭吉の凄さを改めて実感。常に今あるスキル、戦術、ドリルについても日々更新するところから新しいアイデアが創造される。思考の格闘こそ指導者の重要な試練である。

3・新聞から

◆「違うところを感じするってことがなきゃ、人生なんてつまないんじゃないですか」〈朝日：折々のことば・羽仁進〉：好きな人同士、似た者同士ばかりが集まって活動するところに大きな変化、進歩は生まれにくい。チームも同じ。自分と気の合う仲間としか練習しないチームは残念ながら明日はない。古人曰く、自由は不自由の間に生ず。

◆「できない理由はできる理由になる」〈朝日：ひと・出合祐太〉：北海道で初めてできた野球独立リーグ代表の言葉。選手に報酬はなく、地域貢献と選手育成が柱。普段はメロン農家で働き、空いた時間に練習するという。お金がない、運営が難しいと言われたが、できた。